

『イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。2 ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。3 イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いに来て、部下を助けに来てくださるように頼んだ。4 長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。5 わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」6 そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所まで来たとき、百人隊長は友達を使いに来て言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。7 ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないと思いました。ひと言おっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。8 わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。』9 イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。「言うておくれ、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」10 使いに行った人たちが家に帰ってみると、その部下は元気になっていた。』(ルカによる福音書7章1-10節)

今日の聖書の言葉では、大変驚かされているイエスさまのお姿が、記されています。「私は、これほどの信仰を見たことがない！」そのように、感動されているイエスさまがここにおられます。何がそれほどまでに、イエスさまの心を動かしたのでしょうか。それは、百人隊長という軍隊の指揮官がイエスさまに見せた信仰に生きる姿でありました。彼はユダヤ人から致しますと、外国人です。遠く外国の土地からやって来て、カファルナウムという街の治安を守るために駐屯していました。その彼がイエスさまに示した信仰であります。それはいったいどんなものであったのでしょうか？

彼はここで、病気にかかって死にそうになっていた部下を、何とか救いたい一心でイエスさまに来てもらうことを望みます。できる限りの手を尽くしたのでしょう。それでも様態が一向に良くならなかったため、最後の手段としてイエスさまに癒してもらえよう助けを求めたのです。ここでこの聖書では、この病気の人を部下と訳されていますが、実際は兵隊の部下ではなく、使用人として百人隊長に従事していた「奴隷」の一人でありました。奴隷というのは当時はお金を払って買うものでありましたので、一般的には奴隷が病などで死んだのならまた買い直せば良かったのです。奴隷一人の買値は、おおよそ銀貨 30 枚であり 100 人の兵隊を預かる彼にしてみれば、そんなに痛くない出費です。そこまで手を尽くして自ら奔走するほどのことでもありませんでした。なぜ彼はそこまでしてこの奴隷を助けたかったのでしょうか。

ここでこの奴隷は、その百人隊長から「大変重んじられていた」とあります。この言葉の意味は、大変重いものでありまして、自分にとって本当にかげがえのない対象にだけ向けられるときに用いられる言葉です。つまりこの百人隊長は、お金で買える奴隷の一人といえども、自分にとってかけがえのない存在として大切にしていたのです。まるで愛する我が子を死から救うために奔走する父親のように、この人の命を心から尊ぶことをいたしました。そのような人の命を心から慈しむ一人の真摯な人間の姿に、イエスさまは大変心から感動なされたのです。

さらに言いますと、彼は「ユダヤ人を愛していた」とここで記されています。彼にとってユダヤ人とい

うのは、自分たちが戦争によって征服したところに住む住民たちでしたので、ユダヤ人に対して大変優越した位置に立っていました。どの時代でも、どの地域であっても、征服した住民たちに対して、酷く馬鹿にした軽蔑をともなった扱い方をするのが一般的だと考えられます。食事の時には同じ席に着かせないとか、同じ地域には家を建てさせないとか、そこには大きな優劣の壁を設けるのが一般的でありましょう。しかし、この百人隊長は違っていました。一人の奴隷を我が子のように大切にしている彼は、征服したユダヤ人たちに対しても同じように、かけがえのない存在として丁重に関係を結んだのです。そこには軽蔑も優越感も何もなく、まったく対等な同じ人間としての尊厳を敬う清らかな心があるだけです。彼にとっては、どちらが上とかどちらが下とかはなく、どちらも同じ赤い血が流れている互いに愛し合うように与えられている隣人なのであります。

そして、彼はここで、ユダヤ人たちのために会堂を建てたとあります。この会堂というのはつまり礼拝堂のことです。ユダヤ人たちが心から大切に祈りを捧げる神聖な場所であり、彼らの心のよりどころでありました。これも一般的ではありませんね。大抵は征服した土地に対しては、自らが拝む神をまつる神殿とか聖所を、無理矢理に土地の住民に押しつけるものであります。しかし彼はそれをしないどころか、なんとユダヤ人たちが命そのものだと大切にしているその会堂を、自らの財を投じて建てたのだというのです。これにはイエスさまがビックリするのも当然です。こんなことをしてそれが彼の上司に知れたら、どのような処分が降るかわかりません。身柄を更迭されて本国に送り返されるか、それとも最悪地位や財産も没収されて僻地へ追放されかねません。彼は自らの身の安全を危険に犯してまで、ユダヤ人たちの信仰に敬意を払い大切に尊重したのです。「互いに愛し合う」というのは、こういうことをいうのですね。

そしてさらに言いますと、この百人隊長は、イエスさま自身に対してもその互いに愛するという姿勢を向けたのです。イエスさまはユダヤ人でしたので、基本的にはユダヤ人たちの法律や慣習に従って行動しなくてはなりませんでした。その場合、ユダヤ人の大変厳しいしきたりとして、外国人と深く接したり、家の中に外国人を迎え入れてはならないというものがありました。ですので、彼はイエスさまの置かれている立場をおもんばかって、イエスさまが苦しい立場にならないように、イエスさまのことを優先して行動いたしました。自分の愛する奴隷が死にそう、今すぐにもでも治して欲しいと彼は切に願ってしまいました。しかしだからといって、自分さえ、自分たちさえ良ければ、他の人はどうなってもかまわないとは彼は致しませんでした。ぎりぎりの追い詰められた状況の中でも、ユダヤ人のイエスさまが困ったことにならないように自らの願いを押し殺したのですね。「武力によって力づくで征服し、普段はユダヤ人たちを苦しめている自分たちが、困った時だけ彼らに助けを求めるなんて、本当に図々しいことだ。そんな都合良いことを、自分はして良いのだろうか。」そう思い悩んで決断したということも、あったかもしれません。

そして、彼はイエスさまを迎えるのに、自らの友達を迎えるために送ったのだとあります。彼は他にも何人も奴隷を手元に抱えていたはずですので、その中の一人を使いに行かせても良かったのです。そうしなかったのは、ユダヤ人のイエスさまを対等に、いえそれ以上に考えていたからです。一般的には、奴隷を使いに行かせるのは、相手が下の地位にある人の場合だけです。彼にとっては奴隷もかけがえのない存在でありましたが、しかし相手や世間からすると失礼なことにあたります。ですので、この場合もイエスさまの立場を優先した、配慮ある行動を彼は行っていたのだということです。これらの謙遜で誠実な百人隊長の姿を知って、まだ会ってもいませんでしたが、イエスさまはすっかり彼に心を奪われてしまいました。

しかし、それではいったいこの百人隊長は、どこでそのような信仰のあり方を身につけたのでしょうか。イスラエルの中、ユダヤ人の中にも見ることの出来ない神の御心に忠実に生きる信仰を、どのようにして彼は到達して行ったのでありましょか。当時のユダヤ人たちの会堂は、基本的にはユダヤ人だけしか礼拝は出来ませんでした。しかし非公式には、外国人たちもその会堂の外から礼拝の様子をうかがうことが出来たとのことです。そのような外国人は、「神を畏れる人」と呼ばれています。この百人隊長もその中の一人だったのだということです。イエスさまもこのカファラナウムにある会堂で、礼拝の時何度も聖書からのお話、説教をなされています。たとえ直接的にイエスさまの教えを聞いていなくとも、大変印象的な聖書の教えを伝え合う会堂を繋ぐネットワークが出来ていましたので、そこからイエスさまの教えを聞いていたということもあったのでしょう。正式に会堂に属した信仰者とはなれなくとも、誰よりも熱心にその教えに耳を傾けてその信仰に生きることを彼は実践していたのですね。

イエスさまの特徴的で主な教えの中に「神は人を分け隔てしないのだ」ということが、あります。「神さまは男性だけでなく、女性も等しく大切な存在としてお造りになったのだ。だったら自分も同じように、どちらに対しても同じ接し方で大切に関わろう。」そう考えたのです。「神さまは奴隷であっても、他の人と変わらない人間としての尊厳を与えられているのだ。だったら自分も他の人と変わらない態度で、奴隷の人たちにも接していこう。」そういつて、行動いたしました。「神さまはユダヤ人も、自分たちの人種と同じ尊い存在の価値を置いておられるのだ。だったら酷いバカにした扱いなど決してユダヤ人たちに対してしてはならないのだ。」そのようにして、彼は至極単純に自分がその耳で聞いたイエスさまの教えに対して、素直な反応をただけなのです。そして「そのような教えをなされるイエスさまは、奴隷であっても、外国人であっても、同じように大切にしてくれるはずだ、きっと願いを叶えて下さり、病気を治してくれるはずだ」と、心から信じたのですね。反対に、当時の多くの神の民たちは、人種の違いを分かた壁を乗り越えられないでいました。ですので、イエスさまの教えを結局受け入れられずに、拒否してしまうことになってしまったのです。彼はそのような硬直した信仰のあり方から自由だったので、返ってイエスさまの教えを誰よりも単純に、素直に実行することが出来たのだというわけでありませう。

そして彼はここで、「自分は権威の下におかれていて、自分の部下の兵隊や奴隷たちに命令を下して言うことをきかせることができます」と、イエスさまに言っています。この場合の「権威」というのは、どのようなものだったのでしょうか。彼は百人の兵隊の隊長なのですから、当然軍法によって厳しく上官の命令に従うように兵隊たちを統率することが許されています。奴隷も同じで、むやみに逆らったらただでは済まないように、厳しく管理することも出来ました。しかしそのような制度上の権威によって、百人隊長は兵隊たちや奴隷たちを従えていたのでしょうか。私は違うと思います。一人の奴隷をも、かけがえのない存在として大切にすることで、彼は深くみんなから信頼をされていたのです。普段は敵対して憎み合っていたユダヤ人たちでさえ、彼の神の愛に生きる姿に対して心を開きました。忠実に神のみ心に従って生きることによって、神の権威をも彼はその身に帯びるところまで与えられていたのだと言えるでしょう。

この先、彼がそのまま軍人を行って行ったのかはわかりませう。イエスさまの教えに忠実に生きることで、もしかしたら軍隊から除隊して行ったのかもしれないと私は思います。なぜなら、「剣を取るものは、剣によって滅びるのだ」という言葉も、イエスさまの教えの中心部分にあるからです。イエス・キリストの癒しをもたらす力を最も妨げなく伝えることの出来るのは、彼のようなすべての壁を打ち壊

した時なのです。それは、直接イエスさまに触れていただかなくとも、その言葉を間接的に伝えるだけで十分なほどに、何の妨げもそこには存在していませんでした。彼の愛するこの奴隷の人は、すっかり元気になって家に帰ることが出来ました。

イエスさまさえ、神さまさえも、ビックリさせるこの彼の信仰を、私たちも心から敬意を払い、そして少しでも彼に習うものとなれますように、恵みの神さまに願い求めたいと思います。